

筆者は、〈古言〉が「其詞の用ゐられる範囲が狭められ」、アルシヤイスム (archaism)、「つまり古語の懐古趣味に陥っていく傾向を指摘する。擬古文においてはこの「窮屈感」が「一層甚だしくなつて来」ている現状を石川雅望の「都の手振」や「北里十二時」等の作品にみて取っている。「都の手振」は文化六（一八〇九）年に刊行されており、古着市、見世物や旅館など江戸の風俗を擬古文体で記した随想である。「北里十二時」は新吉原遊郭の異名北里の一日を雅文体にてスケッチ風に描いた滑稽本（刊行年未詳）である。これらの作品を例に挙げ、「擬古文でさへあるなら、文の内容が何であらうと、古言を用ゐて好いか」と問い、「必ずしもさうで無い」と結論づける。すなわち、擬古文での〈古言〉使用も「文体にふさはしくない内容」があり、それは結果的に読者の「受用」、享受、鑑賞を損ねると記す。筆者は「保守の見解にのみ安住してゐる窮屈に堪へない」心境を告白したうえで、守旧派の見解に動じず、「口語体の文に於ても」平然とした態度で〈古言〉を「著意して敢て用ゐる」必要性を強調する。〈古言〉が「擬古文の中にしか用ゐられ」ないことに留意し、「不用意に古言を用ゐる」皮相性を牽制しつつ、「口語体の文」に於ても意識して〈古言〉を使用する必要性を主張する。〈古言〉のもつ「宝」を生かしつつ、さらに〈古言〉に「新なる性命を与へる」行為を説いているところが特徴である。

それは、言葉のもつ意味を考へるうえで示唆に富んでいる。言葉は「その行はれた時と所との色を帯び」という時代「固有の

色」をもつと同時にそれらを払拭する不朽性をも有するという二面性がある。また、言葉を用いる人間の態度について言及している点も見逃してはならない。言葉は時代の産物であり、その束縛を受けつつも新しい意味づけが付与されることによって生命を維持し、不朽性をもつと共に、時代を超えてそれを用いる人間たちの思考の持続性が保証されることを示している。

二

第二章は、〈空車〉という〈古語〉を実際に口語文で用い（ることを試みた）た文章である。前章で「文自体に於ては猶調和を保つことが努められて」いるが、文自体から「古言を引き離して今体文に用ゐたらどうであらう。極端な例を言へば、これを口語体の文に用ゐたらどうであらう」と発意し、自ら「文章を愛好する人は之を見て、必ずや憤慨するであらう」と推測している。「古言を其中に用ゐたのを見たら、希世の宝が粗暴な手に由つて毀れたのを惜んで、作者を陋とせずにはゐぬであらう」と口語体のなかで〈古言〉を使用することが、世にも稀な宝物を壊した人間の浅薄さに喩えているところから推して、この当時〈古言〉を口語体に用いることが如何に荒唐無稽であったかが窺い知れる文章である。その「分疏」は、前章にて明らかにしたところである。

これまで〈空車〉が「くうしゃ」あるいは「からぐるま」と訓

まれてきたことに、「わたくしの意中の車と合致し難い」旨を語り、その理由として「くうしゃ」は「耳に聴いて何事とも弁へ難く、「からぐるま」は「懐かしくない詞であ」り、「その上軽さうに感ぜられる」ゆえ「忌避」することが述べられている。そこで筆者は次のように訓み改めることによって、新たな意味を付与しようとしている。

わたくしはむなぐるまと訓むことにした。わたくしは著意して此古言の帯びてゐる時と所との色を奪つて、新なる語としてこれを用ゐるのである。

このように〈古語〉が時代に規定される要素を払拭し、「新なる語」として蘇らせる試みがなされている。

本章はさらに三節に分ることができる。第一節は、「意中の車」の概略を説明している箇所である。

わたくしの意中の車は大なる荷車である。其構造は極めて原始的で、大八車と云ふものに似てゐる。只大きさがこれに数倍してゐる。大八車は人が挽くのに此車は馬が挽く。此車だつていつも空虚でないことは、言を須たない。わたくしは白山の通で、此車が洋紙を掲載して王子から来るのに逢ふことがある。しかしさう云ふ時には此車はわたくしの目に逢ふまらぬ。

「わたくし」の「意中の車」とは、「馬が挽く」大八車の数倍もある「大なる荷車」である。ただ、その車が実際に荷物を十分に積載しているときは心に留まらない体が描かれている。

第二節は、〈空車〉が筆者を魅了する様が語られる。

わたくしは此車が空車として行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。車は既に大きい。そしてそれが空虚であるが故に、人をして一層その大きさを覚えしむる。この大きい車が大道狭しと行く。これに繋いだる馬は骨格が遅しく、栄養が好い。それが車に繋がれたのを忘れたやうに、緩やかに行く。馬の口を取つてゐる男は背の直い大男である。それが肥えた馬、大きい車の霊でもあるやうに、大股に行く。此男は左顧右眈することをなさない。物に遇つて一步を緩くすることをなさず、一步を急にすることをなさない。旁若無人と云ふ語は此男のために作られたかと疑はれる。

前節を受けてこの車が〈空車〉として行く際に出交わすとき、「わたくし」は「目迎へてこれを送ることを禁じ得ない」と語る。「目迎へてこれを送る」とは、左丘明「春秋左氏伝」中の「目逆而送之」から採つており、「逆」と「迎」は同義語、招いて来させる、来るものを受ける意で、来るものを見守り迎え、また過ぎ

去つていくのを親しみを込めて見送る情景を彷彿させる。

此車に逢へば、徒歩の人も避ける。騎馬の人も避ける。貴人の馬車も避ける。富豪の自動車も避ける。隊伍をなした士卒も避ける。送葬の行列も避ける。此車の軌道を横るに会へば、電車の車掌と雖も、車を駐めて、忍んでその過ぐるを待たざることを得ない。そして此車は一の空車に過ぎぬのである。

この車に逢うと「徒歩の人」も「騎馬の人」も「貴人の馬車」も「富豪の自動車」も「隊伍をなした士卒」も「送葬の行列」も「避ける」のである。「避ける」という言葉がこの短い文章中に六回も連続して使われていることに思いを馳せる必要がある。大八車の数倍もある「大いなる荷車」だから権力や身分を有するあらゆる層の人物でさえこの「空車」を避ける様が描かれる。この時の「避ける」とは、荷車があまりにも巨大であるため意識して遠ざかざるを得ない光景と「空車」だから人々の注意や関心を惹かず、気にも留めない状況が重ねられていると言えよう。それと対照的に「目迎へてこれを送る」「わたくし」は、この荷車にとても惹かれており、細心の注意を払って観察している様が映し出されている。

「わたくし」がなぜこの荷車に興味関心がわくのか。第一に荷車そのものが大きく、その構造が極めて原始的であること。第二

にこれを挽く馬が遅しく、しかも「車に繋がれたのを忘れたやうに、緩やかに」悠々と進んでいること。第三に馬方もまた「左顧右眄することをなさ」ず、「物に遇つて一步を緩くすることをもなさず、一步を急にすることをもなさない」。馬も馬方も周囲を気にせず、迷いためらうこともなく、自由気儘に振る舞っている様子が「わたくし」を魅了させていることがわかる。全体が一個の「空車」として、何物にも囚われず、自己のペースで堂々と歩を進めていることが重要である。車が空っぽだから、馬も馬方も苦しまずに気楽に余裕をもつて前進することができるからである。存在感があつてなおかつ素朴で単純である荷車、その空っぽの車が楽々と進む様に惹かれ夢中になる「わたくし」が描き出されている。

本来われわれは、ぎつしりと荷物を山積みしている車、息を吐いて進む遅い馬、馬方は八方に気を配り荷車や馬を束ねながら一心不乱に運んでいく、そのような姿を想像しながらそれらが魅力的で美しいと感じてきた。そこからそれぞれの役割を真面目に確実に果たすことの大切さ、人馬一体とも言ふべき調和、大きな荷車や遅く栄養が好い馬、背の直い大男の馬方からあふれんばかりの生命力を導き出すことは容易い。しかしながら、この文章は逆にこの荷車が「空虚」であるがゆえに価値があることを示している興味深い。何物にも制約を受けない態度や物を運ぶことだけを目的としない指向が呈示されているからである。この時期筆者は文芸をそのような視点から捉えていたのではないか。

これは文芸とは何か実利を尊ぶための手段ではなく、文章を書く行為、文芸について思考する行為そのものが目的であることを婉曲的に表白した表現だといえる。文芸とは〈空車〉を挽くようなものであり、その行為自体に文芸の本質が存在することをその〈空虚〉感とともに語ったところが特徴的である。第二節最終行「そして此車は一の空車に過ぎぬのである」という一文とこの荷車を〈空虚〉という熟語で形容した真意はここにある。

第三節は、前節での見解を強調する形で締め括られている。

わたくしは此空車の行くに逢ふ毎に、目迎へてこれを送ることを禁じ得ない。わたくしは此空車が何物をか載せて行けば好いなどは、かけても思はない。わたくしが此空車と或物を載せた車とを比較して、優劣を論ぜようなどと思はぬことも、亦言を須たない。縦ひその或物がいかに貴き物であるにもせよ。

たとえどんな貴重品を積載している車よりもこの〈空車〉こそが魅力的であることを述べているところが肝要である。原稿用紙(四〇〇字詰)約七枚程度の短い作品に前、前々節に引き続き「目迎へてこれを送ることを禁じ得ない」、「言を須たない」という表現が使われていることにその魅力の秘密が匿されている。「或物」がどんなに貴重であろうと、それは車そのものの価値ではない。そのように考える筆者はおそらく〈空車〉そのものに価

値を見いだしているからだろう。〈空車〉の魅力とは、この〈空車〉の姿に一切の実用価値を排した自由な存在として、無用の価値を発見したからにはかならない。

第一章に於て「宝を掘り出して活かしてこれを用ゐる」と記し、「古言に新なる性命を与へる」と書き表わしたことに重ねれば、それは〈古言〉として「くうしゃ」あるいは「からぐるま」と訓む時の意と違つて、〈空車〉を「むなぐるま」と訓むことにより新しい意味を付与することを目標とする。ここに「くうしゃ」や「からぐるま」が用のない車と解釈されるのに対して、「むなぐるま」は何物にも囚われないことを形容する意味ある車として位置づけられて魅つたのであり、その魅了する様を「春秋左史伝」の一節を使いながら自己の心情を語つたところが、言葉のもつ不朽性、連続性を示し得ていて味わい深い。〈古言〉の再発見から新たな語として甦らせた際価値観の転倒が行われたことにも驚かされる。それはたんに語の意味変容ということではなく、新たな語として「時と所との色」を得たことを示している。言い替えれば、新時代での価値観を表わし得る語として生まれ変わったことになる。それを可能にしたのが筆者の問題意識にほかならない。

三

筆者は、〈空車〉を「むなぐるま」と訓むことによつて、新たな三つの感情を付与させている。それは解放感、空虚感、願望

感からなる。前述の通り、この随想が陸軍軍医総監、陸軍省医務局長を辞任した直後の執筆であることを考慮するならば、〈空車〉をして自ら軍務・官僚職を辞し、一在野人としての自己の感情をその解放感と置き換えて読むことができる。一方で、退職後は何にも束縛されずに解放感を味わい生きられたかと問われれば、現実にはむしろ空虚感を伴う生活が待ち受けていたといえるかも知れない。事実同じ随想「なかじきり」〔斯論〕第一巻第五号 大正六・九〕には次のような胸中が綴られている。

老いは漸く身に迫つて来る。前途に希望の光が薄らぐと共に、自ら背後の影を顧みるは人の常情である。人は老いてレトロスペクティブの境界に入る。(中略) 歳計をなすものの中為切と云ふことがある。わたくしは此数行を書して一生の中為切とする。しかし中為切が或は即総勘定であるかも知れない。少くも官歴より観れば、総勘定も亦此の如きに過ぎない。

解放感の裏に潜む空虚感、それは淋しい光景へと変わりゆく要素を含むものであり、そうした当時の筆者の心境を照らし出すその視点から〈空車〉を解釈することはあながち的外れではない。その空虚感は何によつて満たされるか。それを埋める術として人は想像と行為を繰り返す。想像と行為が一体化したものが文章執筆であると考えると、その言語化の過程で人間の願望が託されて

表現されることがしばしば起こり得る。つまり、筆者のなかでその空虚感が積極的な側面をもち始めるとき、それはある種理想化された形で登場する場合がある。その意味から〈空車〉が全ての束縛からの自由や実利的態度を超えて形成される芸術的態度を標榜して表現されていることは想像に難くない。

このような視点は、退官時の鷗外の解放感、その後の空虚感を埋める行為としての史伝執筆、理想的文芸観に結びついていくと考えられる。

結

この随想は、言葉に深く関わりながら、幾重にも重なる言葉のもつ重層性を捉え、表現し得ている点において優れている。また、言葉が孕む時代性についても言及しているだけでなく、時代に決定的に規定される言葉の性格を逆手にとり、〈古言〉を〈新語〉として蘇生する術を披露することによって、言葉というものがいかに自由で発想の源たり得るかを示し得ている点においても秀でていいる。そして、文中に於て語り手「わたくし」を全一九回登場させているその強調の意図が、より屈折した人間の感情を表現することにあり、この随想の特色ともなり得ていることは特筆されるべきである。同時に、筆者と語り手とが距離を保つことによつて、筆者が語り手を相対化する視点を獲得していることもこの作品の奥行を深めている。従来の研究がはじめから無批判

的に筆者鷗外と重ねて分析、鑑賞し、長年作品を平面的な解釈に留まらせてきたことと区別されるべきである。

「空車」が言語の様々な位相を表現し、それらが結び目となって全体の枠組みへ広がる構成となっていることは、文章の豊饒さと相俟ってこの随想をより趣き深いものに行っている。

注

(1) 後に、昭和八(一九三四年)二月森於菟、森潤三郎編『鷗外遺珠と思ひ出』(昭和書房)に収録される。

(2) 唐木順三『森鷗外』(世界評論社 一九四九・四)

(3) 千葉俊二『森鷗外の随筆』(国文学 解釈と鑑賞)至文堂 一九九二・一一)

(4) 吉田精一『解説』(『森鷗外全集7』筑摩書房 一九七二・八)

(5) 稲垣達郎『森鷗外』(学燈社 一九五六・一二)

(6) 「洪江拙齋」(『東京日日新聞』「大阪毎日新聞」一九一六・一〇～一五)、「伊沢蘭軒」(『東京日日新聞』「大阪毎日新聞」一九一六・六～九)、「北条霞亭」(『東京日日新聞』「大阪毎日新聞」一九一七・六～一二)、「帝国文学」一九一八・二～九、「アララギ」一九二〇・一〇～一九二一・一一)を指す。

(たきもと・かずなり 本学教授)